
平和に埋もれた魔王の契約

壱号/亥識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和に埋もれた魔王の契約

【Nコード】

N9459N

【作者名】

雫号/亥識

【あらすじ】

魔王は死んだ。勇者ウィリアムの手によって、世界に平和が訪れた。誰一人として、平和に埋もれた“契約”を知らないまま。

00 最終決戦（前書き）

RPG的なファンタジー世界を舞台にしたよくわからないモノになると思われます。

他の作品と同時進行というエターナる臭がぶんぶんするゼエーンな作品ですが、生温い目で読んでくださると嬉しいです。

00 最終決戦

魔王城、玉座の間にて。

対峙する二つの人影が、そこにあつた。

「……はあっ、はあっ」

息も切れ切れに、だがしっかりとした目付きでもう一人の人影を見据えるその青年。

名を、勇者ウィリアム。

「……………くく」

対照的に、余裕綽々といった様子でその様子を見ている男。名を、魔王ルシファア！。

人間代表と魔族代表が対峙する。
ラストバトル
最終決戦だった。

「勇者よ、何故お前はその剣を取る」

杖をその手に持ち、魔王は訊いた。

「仲間の為、平和の為　　そして何よりも、自分の為だ」

両手で大剣の柄を握り締め、勇者は魔王を睨み付ける。

「逆に訊こう。魔王よ、何故お前は人を殺す！」

「理由など無い。強いて言うのであれば　　そう、貴様と同じ。我
の為よ」

そう答えた魔王は、くくつと笑いを漏らす。

嘲るように笑う魔王。勇者はより一層強く剣を握り、

「……俺は、お前とは　　違うッ！！」

魔王へと飛びかかった。

迫る銀の刃が、魔王のその身を切り裂かんとする

！

が。

「……いや、同じだ」

その刃は、魔王の歪んだ笑みの前で止まる。見えない“何か”に、勇者の剣は阻まれた。

「己の欲の為に己の力を振るう　それでだろう。力有る者の思う
仮に世界は回るのだ」

言いながら魔王がゆっくりと右手を横に薙ぐと、見えない“何か”が、剣を押し退ける力を増していく。

「　　っ、う……ぐああっ！」

遂には勇者が吹き飛び、玉座の間の扉へと叩きつけられる。

「……さて、ここで一つ。我からの提案がある」

「誰が、そんなもの……聞くか」

一緒に吹き飛ばされた剣を杖のようにして、勇者はゆっくりと立ち上がる。

しかし。もう勇者に剣を振るう程の力は　　無い。

「何、お決まりの『世界の半分を』なんて事じゃあない。もっと
単純で、簡単な契約だ　　」

「………」

魔王の問いに、勇者は沈黙で答えた。答えるほか無かった。

魔王はにやりと口角を上げ、そして言い放つ。

「　　我を殺せ、勇者ウィリアム」

魔王は死んだ。

勇者ウィリアムの手によって、世界に平和が訪れたのだ。

誰一人として、平和に埋もれた“契約”を知らないままに。

01 銅の原野

世界に平和が訪れて、もう二十年が過ぎようとしている。

魔王の魔力によって創られた魔物達はとっくに消え去った。自ら魔力を生み出せる魔族達も、平和という物に馴染みきっている。

元からある国同士の争いは未だ消えないが、それでも世界は平和になったのだ。

大陸の中心に位置する国。
勇者の生まれ故郷として有名なその国の、城下町。

「……はっ、はあっ」

大通りを駆ける少年の姿があった。

髪は黒く、その瞳も黒と、典型的な東洋人の少年だ。肩掛けのかばんを掛けて、その手には丸められた羊皮紙を持っている。

と、少年は一軒の家の前で急ブレーキし、木のドアを猛烈にノックした。

「クライヴ様！ 起きてくださいーい！ お届けモノでーっすー!!」

「はいはい……もうちょっと静かにしてくれって毎回言ってるだろ……」

きい、とドアが開いて、中から金髪蒼眼の青年が現れた。

彼の名はクライヴ・カッパーフィールドと言う。

気だるそうに目をこすりながら現れた青年だが、これでも王室直属の騎士見習いである。

「あっはは、すいませんねホント……あ、そうそう。王様からお手紙ですよ」

「……手紙？」

少年の言葉に、思わず聞き返すクライヴ。王様からの直々の手紙
さて、何か呼ばれるような事をしただろうか？

クライヴはそんな事を考えながら羊皮紙を受け取る。

「ま、とつとと読んじやってください。そういう伝言もあったんで
「はいはい、ご苦労さん」

クライヴが礼を言つと、少年はまた別の所へと走っていった。

「……さて、と」

後ろ手にドアを閉め、丸められた羊皮紙を開きながらクライヴは
椅子に腰を下ろす。

「一国の主が、見習い騎士^{おれ}なんざに何の用だろつねー……つと」
小さく呟きながら、彼は羊皮紙を広げた。

騎士見習い諸君へ。

やあ。元気にしているかな？

堅苦しい挨拶は苦手なので率直に言わせてもらおう。

平穏な世代に生まれた君達には信じられないだろうが、魔物が現
れた。

「……は？」

書いてあつた文字を認識して、思わず羊皮紙を落としそうになる。

魔物が現れた？ 自分が生まれるよりも前、勇者が魔王を殺した
筈だ。また魔物が現れるなんて有り得ない。

そう思いながらも、彼は続きを読む。

そもそも、この世界から魔物が消えたのは魔王が死んだからだ。
奴らは魔王の魔力で構成されていたからね。

にも関わらず、また魔物が現れた。これは由々しき事態だ。私達も総力を上げて調べてはいるが、私達では調べられる事柄に限界というものがある。

そこで、見習い騎士君達にお願いがある。

『現れた魔物の討伐、及び原因の究明・解決』だ。

国の近辺で魔物の迎撃をするもよし、ありとあらゆる所で情報を収集するもよし。君達の思う所を行って欲しい。

これはあくまで命令ではなくお願いで、やるやらないは君達の自由だ。

それでは、君達の息災を願っているよ。

国王、アラン・イザードより

「……………マジかよ」

小さく呟いて、彼は視線を天井に放る。

(……………魔物の討伐？ 原因の究明？ 生まれてこの方実戦経験ゼロ俺達の見習い騎士が？)

出来る訳が無い。

剣の修練に、魔法理論なんかは、騎士養成所で一通り習う。

特に剣の修練は、手合わせをよくするが、実践とは大違いだろう。

「パス、だよなあ……………」

羊皮紙を適当に放り投げ、彼は外へ出る。

休日を街で無駄に過ごす。

それこそが、見習い騎士クライヴ・カッパーフィールドの生き甲斐なのだった。

02 鉄の姫君

相も変わらず街は平和で、本当にいつも通りの風景がそこには広がっていた。

城下町に広がる、市場でのことだ。

「……あれ？ いつもより駄菓子が良い」

王室直属騎士団所属の騎士見習い、クライヴ・カッパードは駄菓子屋の前でふと足を止め、そんな事を呟いた。

「そっかそっか、今日は満月か」

月に一度の満月の日、この店主は何故だか駄菓子を安くする。

店主が子供達のためにしているのだが、『店主は実は狼男で、満月が近づくと気分が高潮するから安くしている』だなんて噂が流れていたりもする。

「あー、どうしよう。銀貨チョコ最近食ってなかったしなあ……いや、しかし今日の飯の分も考えて」

「クラーイーヴーっ！」

あーだこーだ考えていると、“何か”がクライヴの体を跳ね飛ばした。

……いや、正しくは“誰か”なのだが。

「やつほー！ 元気してたー？ って……あれ？ 何か元気ないっばいけど大丈夫？」

「……これが大丈夫に見えるならお前は病院に行った方がいい。眼科と精神科と両方だ」

地面に倒れこんだクライヴ。その上にちょこんと　クライヴにしてみればずっしりと　乗った小柄な少女。

彼女の名はアリス。

本名はアリシア・アイアンズという。王室直属魔術師団に所属す

る見習い魔術師であり、クライヴの友人でもある。

「あつ、すみませーん！ 銀貨チヨコ3枚くださーい！」

「人の話を聞けえ！」

仕方ないわねー、とか言いながら、クライヴの上から退くアリス。店主から銀貨チヨコを三枚受け取り、そして銅貨を2枚払う。

いつも変わらない味、銀貨チヨコ。一枚一銅より。

「……で、人様にタツクルかましたからにはそれなりの用があるんだらうな？」

「や、大した用じゃないんだけ……ちょっ冗談だから剣を抜くな怖い！」

「……まあ、お前の事だしロクな事じゃないのは見当ついているけど。言ってみるよ」

「ふっふーん。よくぞ訊いてくれました、つとねー……」

と、アリスが肩から提げていたかばんの中を探り 一枚の羊皮紙を取り出した。

「羊皮紙、って ……え、おい。嘘だろ？」

見覚えのあるその羊皮紙。クライヴは半ば引きつったような笑みを浮かべた。

そしてアリスは言う。

「『現れた魔物の討伐、及び原因の究明・解決』 あんたもやるわよね？ 無論『討伐』の方」

クライヴとは対照的に、その表情は満面の笑みだった。

「……はあ」

面倒くさい、とクライヴは心の中で呟いた。

「……今なんて言った？ 聞こえなかったからもう一度言ってみて」
「だー、かー、らー。俺はやらない、つつつてんの」

少し時が流れて、数分後。

二人は現在市場を離れ、レンガ造りの住居が建ち並ぶ通りを歩いていた。

「何よそれーっ！ 魔物よ？ 魔の生き物よ？ モンスターなのよ？」

「阿呆か。仮に魔物と遭遇したとして、見習い^{おれたち}なんざに何が出来るつつてんだ」

「そりゃズバーツポワーツドグシャアーツと」

「最後は何の擬音だよ……それにしたって『討伐』は無理だ。天地がひっくり返るうと、世界の法則が乱れようと、俺達にそんな事は出来ない」

「全く夢の無い ん？ それはあれかしら」

ぴんと人差し指を立て、アリスは言う。

「『原因の究明』ならやるって事？」

「何でそうなるんだよ！ ……いや、確かにそっちなら直接魔物とぶつかる事は無いだろうけど」

「じゃあ、じゃあ！ 拒否する理由は！ 無い！ わねっ！？」

「……………」

両手を頬に当てて、目をキラキラ むしろギラギラ と輝かせるアリスを前に、クライヴは拒否する方が面倒になって、遂に。

「……分かったよ。やりやいいんだろやりやあ うお馬鹿っ」

「きゃっほーっ！！」

言い切る前に、アリスが横から飛びついて来た。抱き付かれるという事は悪くはないのだが、周囲の視線が深々とクライヴに突き刺さっていたりして。

「分かった、分かったから、は、な、ね、ろ！」

「何よー、もうちょっと喜びなさいよー」

ぶーぶー文句を言いつつも、仕方なく拘束を解くアリス。

「そんじゃ、思い立ったら吉日　聞きこみ開始よーっ！」

「おー……」

他人に流されやすい、というか。

クライヴとアリスというのは、昔からこんな仲なのであった。

03 謁見の間

「はあ！？ 街の外には出られないですって!？」

アリスが怒りを隠そうともせずには叫んだ。

「で、ですから申し上げております通り、交易局から発行される許可証がございませんと……」

「……クライヴ、仕事よ。交易局襲ってきなさい」

「阿呆」

「あいたっ」

困り顔の衛兵からアリスを引き剥がして、軽く一撃。

溜息を吐きつつ、クライヴはなだめるように言う。

「あのなあアリス。国王あいつはここをクリアできる 要するにそれなりに成果を挙げている奴である事を前提にあの手紙を届けさせたんだよ。つまり俺達みたいな見習いは何も出来ない。分かるだろ？」

「それは、その……」

クライヴが言うと、目尻に涙を溜めつつアリスは黙り込んだ。

少しして、アリスは服の袖で涙を拭うと口を開いた。

「……分かったわよ、それじゃあ話が早いじゃない」

「ああ、物分りが良くて俺は非常に助か」

「王室に乗り込むわよ」

クライヴの言葉を遮り、アリスはきっぱりと言い放った。

「やあアリス。それに 今日クライヴもいるのかい？ 君も大変だねえ全く」

王国の中心にある巨城

謁見の間。

そこで対峙するのは一人の青年と、一組の少年少女。
机を挟んで二人を見ている青年が言った。

「まあ、あらかた件の手紙についてだろうとは思っただけど
―― 応話は聞かせてもらおうよ。」

「相変らず意地悪よね、あんた……」
「やれやれ、とアリスは肩を竦める。

「……あんた、国王なんだからさ。それくらいの懐の広さがなきや
民は付いて来ないわよ？」

「あはは。ま、真摯に受け止めるとしよう」

青年 『国王』 アラン・イザードは笑って答えた。

「……割って入るようで悪いけど、ちゃっちゃと用件を済ませたい
んだが」

「ああ、ごめんごめん。許可証の事でしょう？ なんちて、あつは
ははは！」

「そうそう！ あれが無きや情報収集も出来やしないわよ！」
「……… ああ、うん。そうだね。あつはは……」

渾身のギャグをスルーされたアランは若干落ち込みつつ、拍手を
数回。

それを合図に、後方の扉から初老の男が現れた。

「大臣、通行許可証だ。見習い騎士が一人と、見習い魔術師が一人
お願いできるね？」

「御意に。それではお二方、暫しお待ちくださいませ」
アランが言うと、「大臣」と呼ばれた男は再び扉の奥へと姿を消
した。

「さ、後は許可証の発行を待つだけだね。特におもてなしも出来そ
うに無いけれど、ゆっくりしていくといい」

「ちょ、ちよつと待って」
少し慌てた様子で、アリスが拳手する。

「はい、アリス君」
そんなアリスを指差して、アランが発言を促した。

「ねえ、その……もうちよつと面倒な事になると思ってたんだけど」
「あつはつは。『僕の所まで来られるか』というのも、ある意味の試験テストだったんだよね。見習いさみたちとは仲良くさせて貰ってる訳だしさ、ここで遠慮しているようじゃ魔物を相手取るなんて　　って事さ」
「……そういうことなら、まあ、良いんだけどさ」
アリスはすこすこ手を下げ、溜息混じりに笑った。

「陛下、お二方の許可証を持って参りました」

「ありがとう、大臣。お疲れさま」

言つと、アランは“それ”を受け取り、二人へと見せた。

「さ、これが君達の通行許可証だ。大事にしてくれよ？」

それ　　通行許可証は、金属で出来た紋章だった。クライヴの騎士の許可証には剣が、アリスの　　魔術師の許可証には杖の絵が刻まれている。裏には髪留めのような物が付いていて、服の襟にでも付ける事が出来そうだ。

二人はそれぞれ許可証を受け取ると、アリスは鞆の肩紐に、クライヴは服の襟にそれを取り付けた。

「……さて、と。それじゃあ、頑張っておくれよ。僕は君達にならできると信じているよ」

アランはそう言つて、二人に優しく笑い掛けた。

「任せてよ。なんてつたつて私は『鉄の姫君』なんだから」

「自称だけどな……ま、程々にしとくさ。あんまり期待はすんなよ国王さま？」

なんですつてー！　と両手でグーを振りかざすアリスと、それをなだめるクライヴ。その二人を眺めながら、国王アランは思考した。(……この二人こそは、『契約』について解き明かしてくれるといけどね)

アランは不敵な笑みを浮かべた。

二人は、それを知る由も無かった。

04 旅の始り

辺りに響き渡ったのは、低く大きく、雷が轟くような音。城下町を囲む塀に備えられた巨大な門が、ゆっくりと開いたのだ。つた。

「では、お気をつけて」

門を守っていた兵士が、二人に軽く会釈をする。

上機嫌にスキップをするアリスはそのまま出て行った。

クライヴは一度立ち止まり、兵士に会釈を返した。直後クライヴはアリスを追いかけるようにして走っていく。

「（……あの二人が将来一人前の騎士と魔術師になるとは思えねーけどなあ）」

と、門を守る兵士は小さく呟いた。

轟音と共に門は閉ざされ、外界と王国なかを分かつ。

「私、思っただけどさ」

少し時間が流れた。

ここは隣町へと続く街道。二人はそこを並んで歩く。

「馬車とか支給されないの？」

「贅沢言うな……大体、俺達は見習いなんだぞ？んな大層なもんいちいち用意できっかよ」

「国王アランならそれくらいしてくれそうだけどねー」

振り返れば、まだまだ城は大きく見える。大して歩いていないのに、アリスはそう文句を言うのだった。

「お前が言い出したんだろ。『原因の究明』をする、って。文句言

うんじゃ　ねえっ」

そんなアリスの脳天目掛けて、クライヴは手刀を繰り出す。無論それなりに手加減をして。

「あいたっ……分かったわよー、もう」

疲れて若干不機嫌だったアリスが、本格的に不機嫌になった。

そんな事を気にする様子もなく、辺りを見回してクライヴは言う。
「……っーか、思った以上にいねえな。魔物。もっとその辺からバンバン出てくるもんかと思ってたが」

「うーん……私もそれ思っただけど、当然なのかもね」

「当然　って、どういう事だ？」

「『魔物』ってというのは文字通り、『魔』の生き『物』なの。魔王が生きていた頃は、その無尽蔵の魔力で魔物を創っていたーって話があったりしてね」

「創る……？　ゼロから魔物を創るなんて事、可能なのか？」

「私達には無理ね」

首を横に振って、アリスはそれを否定した。

「人間の魔力量じゃ、低級の魔物を創る事すら出来ないの。魔族の魔力量を以ってしても、低級の魔物を創るのが精一杯だとか」

「へえ……つまり、魔物をバンバン創る事は不可能　って事か」

「そーいう事ねー」

満足そうにふんふんと頷いて、アリスは胸を張る。

クライヴは腕を組み、考え込むようにうーんと唸った。

「……じゃあ、誰が魔物を創ったんだ？」

「だから、それを調べに行くんじゃない。ほら、見えてきたわよー」
クライヴの言葉をアリスは鼻で笑って、前方に見える建物を指差した。

「物見塔……？　いや、それにしてもっかいよな」

赤レンガ造りの高く、大きな塔。

上の方にはこれまた大きな窓が付いていて、遠くまで見渡せるよ
うだ。

「むしろ、天文台　って言った方が近いかしら」
「星とか月とかを見る奴か。へー……時間あつたら行ってみるか？
今日は満月らしいし、月も綺麗なんだろうーな」
「私としてはあそこから魔物を探したいんだけど」
「ロマンがねえ」
小さく吐き捨てて、クライヴは歩みを速めた。

リッチタウン。
というのが、この小さな町の名前だった。
周囲には山々　それぞれはあまり大きなものではない　が幾
つか在り、近くには大きな川が流れている。
そんな牧歌的な町に流れる噂が、人々の心に小さな不安を与えて
いた。

魔物の出現。

曰く、直接目にした者は一人もいないが、大きな狼の遠吠えを誰
もが耳にしている。
曰く、聞いた者に恐怖を与えるその遠吠えは、近頃強くなっ
てきている。

「……狼、ねえ」
宿屋のロビー　その壁に寄りかかって、クライヴは呟く。
町に着いた二人は、早速人々に聞き込みを開始した。
二人が別々に聞き込みをして、様々な情報を集める。そして、二
人は一つの同じ情報を手にしていたのだった。

「やっぱこれ、普通に狼なんじゃないの？ 育ちすぎたとか、突然変異とか」

「だろうとは思っけど……何かなあ」

『町民の殆どがその声を耳にしている』という点が、クライヴは妙に引っかかった。

「……ま、明日町の周りを調べれば良いだろ。解散」

「そうねー……あー、つまんない」

互いに別の 金銭的な問題で一部屋と言いかけたクライヴをアリスが二部屋でと押し切った 部屋へと向かうと、二人はそれぞれ眠りに就いた。

そしてその夜。

二人は狼の遠吠えと、甲高い悲鳴で目を覚ます事になるのだった。

05 月照の狼

月の光に照らされながら、クライヴとアリスは走っていた。

「……っ、はあっ、くそっ……何でここの都合のいい いや、都合の悪い事が……！」

「あっはは……まさか私も本当に魔物が現れるとは思ってなかったんだけど」

そんな言葉を交わし、二人は赤レンガの塔 リツヂタウン天文台へと向かっている。

真夜中に響き渡った狼の遠吠え。それと対になるように聞こえてきた悲鳴。

二つの音の発生源だ。

「 ああ、もうっ！ 面倒ね、飛ぶわよ！」
幾らか走っていると、アリスがそんな事を言った。

「飛ぶ、って……お前そんな魔術使えたって？」

「よーゆーよー、私を誰だと思ってるのよ あんたは先に行つてなさい！」

アリスはそう言って足を止めると、右手を天にかざして呪文を紡ぎ始める。

「 風よ。風の力よ。我が身に集いて翼を為せ。空を裂き 「
……いや、おい。お前は詠唱必要無いんじゃないやなかつたのか？」

思わずクライヴも立ち止まり、後ろを振り返って訊いた。クライヴは、以前アリスが『私は鉄の姫君よ？ 呪文なんて必要ないの』などと調子トキ付いていた事を思い出したのだった。

「 先行けつて言ったでしょ！？ っっていうか詠唱も途絶えちゃつたし……あのねえ、私が得意なのは鉄属性なの。他のは人並みに詠唱が要るのよ！ ほら分かつたらさっさと行くッ！」

「痛つてえ！ 分かつたから叩くんじゃねえやめろ！」

苛立ちを露にして一息に言い、アリスはクライヴの背中に平手を打ちつけた。
早く行け、と目で言うアリスを背に、クライヴは天文台へと走っていく。

天文台の屋上へと続く螺旋階段は、随分と長い。しかもかなりの角度が付いている。この塔を設計した奴にバリアフリーという言葉を叩きこんでやろうか、と思いつつ、クライヴはその階段を駆け上る。王室直属騎士達による訓練のお陰で、この程度では僅かな疲労しか感じない。

どんどんと階段を上っていくと、遂に一枚の扉が見えた。
両開きの木扉は、片方が空きっぱなしになっている。クライヴは階段を上る勢いを殺さないまま、最上階 観測室へと飛び込んだ。

「……そこまでだ って、あれ。居ない……？」

腰に下げていた鞘から、鋼色をした長剣を引き抜き、構えたのはいいが 件の狼が居ない。

右を見る。左も見る。念のためもう一度右を見るが、その姿は何処にも無い。

本棚は全て倒れ、その中身である本は当たりに散乱している。半球状に部屋を覆っているガラスも、何枚かが罅割れている。そして部屋を中心に置かれた巨大な望遠鏡。それだけは辛うじて無事なようだが

「……あれか」
いた。

巨大な望遠鏡の上に座りこみ、月を眺める狼ウルフ 否、人狼ワーウルフ。

全身は青い毛に覆われ、金色の瞳が月光に煌めいている。座り込んでいる為正確には判らないが、その背丈はおおよそ二メートル弱、といった所だ。

その片手には、白衣を纏った茶髪の女性が鷲掴みにされている。ぐったりとしている様子から、恐らくは気を失っているとクライヴは判断した。

生まれて初めて“魔物”というモノを目にしたが、緊張はしていなかった。むしろ、冷静すぎる自分に恐怖を感じてさえいた。

(……行ける)

クライヴは鋼の長剣を右手で握りなおし、それを人狼へと向けて叫ぶ。

「おい、その犬っコロ。その人を放せ！」

人狼が言葉を聞き分けるかは果てしなく不明だが、クライヴは兎角叫んだ。まずは注意を自分に向け、そこから戦いを始めれば良い。そんな事を考えて。

しかし、それが甘かった。

人狼の耳がぴくりと動き、まるで言葉を聞き入れたかのようにゆっくりと女性をその場に下ろした。かと思つた次の瞬間には、人狼はクライヴへと飛んできていた。

飛んできた。

正まにそんな言葉がぴったり合うような、そんな勢いだった。

人狼は鋭く尖った四本の爪を振りかざして、クライヴの胸を裂かんと迫る。

「う、お……つと！」

咄嗟に横に跳躍し、運良く無傷でその突撃を回避したクライヴ。だが人狼は爪を地面へと食い込ませ、舞い上がる紙吹雪の中再びクライヴへと突進してくる。

クライヴも再び回避行動を取ろうとした。だが。

「ぐあッ!？」

辺りを埋め尽くさんばかりに散らばっていた紙に足を滑らせ、体勢を崩してしまった。結果的には人狼の突進が直撃する事は無かったが、その鋭い爪の生えた足で盛大に踏みつけられる事になった。

二メートル程の巨体が持つ重量は並大抵ではなく、一度踏みつけただけでも相当なダメージをクライヴに与えた。

(だから討伐なんて無理だったんだ……！)

心の中でそう毒づいても、クライヴは起き上がる。紙吹雪の大地へと倒れた剣をその手に取り直

「……………お、」
折れている。

剣の真ん中辺りから、綺麗にぼきりと。何かの拍子にしまったらしい。

しかも、折れた剣の先は紙吹雪に埋もれて、何処かへ行ってしまったようだ。

(完つ全に詰み だな)

どさり、とクライヴは投げやり気味に腰を下ろす。

二足歩行へと切り替えた人狼。その金の瞳がクライヴを見据え、鋭い爪を振り上げ

「なーにしてんのよ！ このヘタレ騎士ーっ！！」

パライイン！！

とガラスを砕く音と、やたらと威勢のいい声が木霊した。

ガラスを一枚ぶち破って飛び込んできたアリスが、人狼の下顎を蹴り飛ばしたのだった。

「卑怯極まりねーなお前」

「うっさいわね！ 助けてやったんだから感謝しなさいっての！」

すた、とクライヴの横に降り立ったアリスの背には、緑色の

風の魔力で構成された翼が。クライヴがそれを認識した瞬間、風のように消え去ってしまったが。

「で、あれが魔物、と。案外大した事無いみたいだけど」

「……………そりゃ不意打ちされちゃあな」

勢いを付けて蹴り飛ばされた人狼は、罅割れたガラスのそばで伸びている。アリスはちよいちよいとクライヴをつついて、

「討伐 気が向かないとか言ってたけど。出来るんじゃない？
今なら」

あの女の人は私が助けとくから、と言って、アリスは望遠鏡の方へと駆けて行った。

「……………あー。遂に騎士っぽい事するんだな、俺」

半分に折れた剣を再び手に取り、月と星が瞬く夜空に掲げる。そして、クライヴ・カッパーフィールドは言の葉を紡いだ。

「カッパーフィールド
《銅の原野》！！」

じわり、と滲むようにクライヴの足元が変質する。

紙の吹雪は青銅の欠片に。硝子の破片は赤銅の破片に。

そしてそれらは、欠けてしまった刃を補うように。ゆっくりと、ゆっくりと集まっていく。

赤銅色、青銅色、黒銅色、鋼鉄色、様々な色に煌めく刀身。それを確りと両手で握り、クライヴは人狼の心臓に

「 悪く思うなよ」

突き立てた。

06 爪痕の後

『まずはそう、お疲れさま。そして　よくやってくれた。実に素晴らしい』

「……殆どあいつの手柄だけだな」
アリス

翌朝、宿屋。クライヴの部屋。

いつの間にか荷物に紛れ込んでいた一枚の護符から、一国の王の声が聞こえている。

アランが趣味で作った通信用の護符。ほんの僅かに雑音が混じるが、通信手段としては申し分ない。

『あつはは、しかしあの子じゃあ、止めは刺せなかつたんじゃないかな？』

「あれは俺にだって仕留められてないようなもんだよ……」

あの後。

ワウルフ

人狼の心臓に刃を突き立てた瞬間、観測室に光が溢れた。後にアリスは、あの光は莫大な量の魔力だ、とクライヴに言った。

光が収まった後、人狼の姿は何処にもなかった。

その代わり。一匹の狼が、力無く横たわっているだけであった。

「……結局、人狼は何だったんだ」

『それを調べるのが、君達の仕事だろう』

護符の向こうでアランが笑った。護符越しでも分かるほど楽しげに。

「それ、アリスにも似たような事言われた」

『君は学ばない、という事だね。時に、そのアリスはどうしてる？』

「ああ、あいつならまだ寝てるよ」

『はっはーん……さてはアリス、昨日鉄属性以外の魔術を使ったね？』

「どっから見てもんだお前」

『いや、見てる訳じゃないさ』

周囲を見回すクライヴの様子を知ってか知らずか、アランは苦笑して続ける。

『アイアنزの血　って奴かな。僕の配下にもアイアنزの血を引く者がいてね。彼は消耗した魔力を“喰う”事で補っているんだけど、やはり彼女も　と考えたんだ』

「成程、さっぱり分からん」

『あつはつは。ま、要するに魔術師彼のも戦えば疲れるって事さ。苦手な事をすれば特にね』

「ふーん……まあ、いいや。俺が気にしたって意味無いだろうし」
至極適当にそう言つと、クライヴはベッドに身を放ほうつた。

『色々あつて疲れているだろう？　今日のところはゆっくり休みをとってくれ』

「ん。そうさせてもらつよ」

『それでは僕はこの辺で……あ、この護符は捨てずに持っていてくれよ？　じゃ　』

アランが言い切る前に『ざざつ』と雑音が走り、その雑音も少しして治まった。

「……………っだー、疲れた」

ベッドの上で仰向けになり、目を閉じる。

クライヴの意識はゆっくりと、夢の世界へ沈んで

「ひゃっほーっー」

「こっ！？」

行かなかった。

クライヴの体をくの字に折り曲げ、二度寝ワールドへ沈み行く意

識を一瞬で連れ戻したのは、アリスだった。

騎士見習いの少年　その腹部にダイブを喰らわせた魔術師見習いの少女は、クライヴの方に顔を向けて破顔一笑、

「やーっほー、元気かいクライヴくん？」

「お前が来るまではな！」

「んもーう、釣れないなあクライヴー」

「……気色悪いからその緩みきった頬を引き締める」

「うふふふふ……」

「……はあ」

クライヴが気を失った女性を抱えて、二人で宿屋に戻つてくると、あつという間に二人の名が『リッチタウンを魔物から救った勇士』として広まった。

しかも日が昇りきる前に、だ。

クライヴは小さな町での噂の伝達速度に軽く恐怖し、アリスは正反対に浮かれまくり　そして今に至る。

うっふふふと笑うアリスに、クライヴは呆れたように訊ねる。

「っーか、お前『魔力の補給』とやらはどうしたんだよ」

「んんー？　寝て起きてご飯食べたらこの通りー」

「寝ろ」

「そんな二人でなんて……」

「頬を赤らめるな帰れ。一人で寝てろって意味だッ」

「きゃー」

赤らんだ頬に両手をあてながらくねくねしだしたアリスを蹴つ飛ばし、ベッドから追い出し、クライヴは身を起こす。

「……………本当、疲れた」

絨毯の敷かれた床ですやすやと眠り始めたアリスを尻目に、クライヴは部屋を出ていった。

「……これでよっし。ありがと、助かったよ」

「いや、窓ぶつ壊したのは俺の連れな訳ですからこの位は……」
時は流れ、昼下がり。

場所は変わって、天文台。

「アハハ……でも魔物はいなくなった訳だしさ。むしろそこは感謝しなきゃ」

苦笑いして、白衣を纏った女性は目鏡の位置を直す。

あの夜、人狼に人質にされていた　人狼かれにそのつもりは無かったとしても、とにかくそのような構図になっていた　この女性。

クライヴは観測室の修理を手伝っているところだった。

「しっかし災難でしたね……蔵書は殆ど紙切れに、だなんて」

「まあ……ね。でも、観測記録は無事だったし。天文台こが出来てからずーっと遺されてきた、大事な記録」

「……………」

間違っつてその記録を刃にしていたら自分はどうなっていたんだろ
う、とクライヴは小さく身を震わせた。

「それじゃあ、俺はこの辺で　」

「あ、うん。本当にありがとね」

そう言った白衣の女性に頭を下げると、クライヴは階段を降りて
いく。

天文台の螺旋階段を降りくだきつて、ドアを開ける。

陽の光がやけに眩しく感じられて、クライヴは目を細めた。

「……………ん？」

と、そこでクライヴの目に留まったあるモノ。

「……………おお、かみ」

狼だった。

町をぐるつと囲う低い柵の向こうに座り込む一匹の狼。

その毛並みは昨夜の人狼と同じ　　青。

あの狼の仲間かとクライヴは思ったが、それは違う。よく目を凝らすと、青い毛並みにじわりと赤く滲んでいるところがあった。クライヴが人狼に剣を突き立てた場所だ。

普通に剣が突き刺さっていれば即死であつたはず。しかしどうもそうではないらしかつた。

「……、あ　　」

そこまで考えた辺りで狼はクライヴに背を向け、近くにある森へと姿を消した。

「追……わなくて、いいよな」

一人で小さく呟き、クライヴは適当に辺りをふらつくことにした。本人としては情報収集も兼ねてのつもりらしいが、しかし結局はアテもなく歩き回るだけなのであつた。

07 青の街道

『 という事で、君達にはセルシア湖まで向かって貰いたい』

「セルシア湖……って言うと、この大陸で一番大きな湖だったか？」

『 そう。やはり知っていたかな？』

「流石のクライヴでもそれくらい的一般常識は弁^{わか}まえてるわよ」

「俺は何だ？ 無知キャラ決定なのか？ ……いや、まあそれはいい。

でも、何でセルシア湖なんだ？」

『 君達以外にも、情報を集めてくれている人が居るといふ事さ』

「いや、意味が分からん」

「無知ね」

『 全くだ』

「何だこいつら寄って集って……鬼かこいつら」

「別の見習い騎士、魔術師が集めた情報によると ……って事でしょ

？」

『 その通り。今の所は君達二人が一番セルシア湖に近いからね。と

いふ事で君達にお願いしたい』

「へいへい……了解しましたよ王様」

というような会話があり、今に至る。

クライヴとアリスの二人は、王国を中心として放射状に延びる五

大街道の内の一つ 『 青の街道』を歩いていた。

「この辺は眺めが良いな」

「そう？ 私はリッチタウンの方が好きだけど」

「お前天文台ぶっ壊しといてよくもまあそんな事を……」

そもそも、この大陸には主要となる街が五つ 王都を合わせれ

ば六つある。

大陸中央に在る都『王都』。
鉱石加工に優れた『赤の街』。魔術研究の最先端『青の街』。
エルフ達の居住区『緑の街』。商人達が集う港街『黄の街』。
そして魔王城のあった『黒の街』。

『青の街道』は、『王都』と『青の街』を繋ぐ街道。その道中にあるセルシア湖こそが、今回の目的地である。大陸最大を誇るその湖。

周囲に人が住み着いている訳ではないが、観光地としては名高い場所だ。

「いいじゃない。結局私がいなかったら人狼は倒せなかった訳だし」
「言い返せないのが非常に悔しいな」

そう言って、クライヴは周囲を再び見回す。

セルシア湖から、街道に沿うようにして流れる河川。陽光を照り返し、魚が泳ぐ水面。そんな風景に見蕩れていると、

「あいたっ」
人とぶつかった。

「うおっと……大丈夫ですか？」

「たー……あっはっは。いやー問題ないよー、問題ない。大丈夫過ぎて時が巻き戻るレベルさ」

と、訳の分からない事を口走ったその男。

やけに背が高く、背中には大きな袋を背負っている。その口から覗くのは沢山の武器だった。

長剣、短剣。長槍、薙刀。鉄鎚、棍棒。長弓、短弓。

ありとあらゆる武器がある中で、特にアリスの眼を惹いた『それ』。

「……杖、かあ」

アリスが、ぽつりと呟いた。

紺色の宝石が埋め込まれた、長い杖。

アリスのような見習いが、この男のような『杖』を持つ事はない。正式に魔術師となる事で初めて『杖』を手にする事が出来るのだ。だからこそ、見習い魔術師にとって『杖』というのはそれだけで羨望の対象になる。

「ん？ どうしたんだいお嬢さん。そんなに杖が珍しいかい？」

アリスの視線に気がついた男が、杖を一本引き抜いて尋ねた。

「そ、そういう、訳じゃ。その、見たところ『青の街』から来たみたいだから、気になって」

「あつは、そういう事か。僕は商人でね。杖の需要も生産も高い『青の街』でちよつと一商売してきたところさ」

「へえー……べ、別に気になつたりしてるとかそんな事は」

「……そのまばたきの回数が増えまくって眼が燦々（さんさん）と輝いてるのは何だアリスよ」

視線を奪われるとは、正にこの事。杖に穴が開くほど視線を投げつけるというかもはや突き刺しているアリスを見て、商人の男は杖を差し出しす。

「そんなに気になるなら、使ってみるかい？ お嬢さん」

「えっ、いいの！？ ……あ、いや、でも。私は見習いだから」

きらきらと輝いていた瞳がキラキラ！ と光を放った。しかし、アリスはすぐに俯き気味になって、差し出された杖から視線を外した。

「ふーむ、敬虔だねえお嬢さんは。そこまで言うんなら仕方ない。

僕は先を急ぐとしよう。それでは」

「あ、や、やつぱり待っ……………！」

差し出された杖は、いつの間にか男の手から消えていた。

男は二人に一礼して、アリスの言葉を待たずにすたすたと去って行く。

「……………」

「あー…………そのー、気を落とすな。ほれ、もし買えたとしても相当な値段だっただろうし」

「……………」
「ぎ、行商人ならまた何処かで会うだろ？」

「……………」
「セルシア湖の調査が終わったなら『青の街』で何か買ってやるから

「さーっ！ 気を取り直して行くわよおセルシア湖ッ！！」

「突っ込む気すら失せるわ」

そうして二人は再び歩む。

二人が気にも留めずに通り過ぎた掲示板には、

『この先セルシア湖 危険！観光はご遠慮下さい』

と、それはもう「書き立てです」と言わんばかりの塗料で盛大に書き加えられていたのだった。

08 セルシア

セルシア湖の湖畔には、小さなログハウスがある。

元々は観光案内や、お土産　セルシア湖に住むとされる精霊の力が云々　などの販売を行っていた。

しかし『魔物が現れた』なんて噂が立って以来、営業は休止。現在では周囲を警戒する兵士の詰め所となっている。

……の、だが。

「あー駄目駄目。看板見なかったのかあガキンチョども。遊びで来られちゃ困るんだよー」

「だー、かー、らー！ 私達は王都から来た魔術師と騎士で」

「ハッ。こんなちんちくりんな魔術師サマに騎士サマが居てたまるか。ほら帰った帰ったー」

単刀直入に言えば、追い返された。

「……流石にこのナリじゃあ信じてもらえねーだろ。この通行証だつてあんまり知れた物じゃないみたいだし」

小屋の外　どころか、湖からも少し離れた街道まで追い払われてしまった。

クライヴはわなわなと身を震わせるアリスに対し、宥める^{なだ}るように言う。

「こっちの人の協力が得られないんじゃないじゃあ、調査のしようが無いんだよなあ。情報さえ聞かせて貰えない」

嘆息混じりに腕を組み、思考を巡らせるクライヴ。

するとアリスが伏せていた顔を急に上げて、クライヴの両肩を掴んだ。

「……………」
「な、何だよ急に。また何か物騒な事でも思いついたか？」

「物騒　　と言えはそうかも知れないわね」

淡々と告げるアリスに、クライヴは若干の戦慄を覚えた。年下で、かつ背が自分よりも低くとも、目がこんなにも据わっていたら恐怖を覚えないほうがまず無理だ。

「まさかあの小屋でも襲うのか。俺はやらねーぞ、んな事」

「馬鹿ね。そんな正々堂々馬鹿を晒すのはアンタくらいよ」

「ひでえ」

そうじゃなくて。

アリスはそう前置きして、口を開く。

「情報が聞き出せないなら、聞く必要は無いじゃない」

「……………な、なるほど？」

内容をいまいち理解しないまま、クライヴは頷いた。

「……………くそ、やっぱコイツの思い付きなんか聞くんじゃない」
「ふっふ……………そんな事はこの作戦よりもスマートな作戦を思いついてから言いなさい」

現在地、セルシア湖を囲う森林。

小屋に詰める兵士に情報を聞けば、追り返される。かといって強引に押し入れれば、面倒な事になる。

そして、目的は『セルシア湖の異変についての情報』だ。

ならば、何も兵士達に尋ねる必要は無い。

自分達でその『情報』とやらを探してしまえばいいだけなのだから。

「言うのは簡単で、それ自体もシンプルでいいんだけどよ……」
クライヴは、彼が“背負っている”アリスに向けて言った。

「お前が歩けなくなるくらいなら提案すんじゃないやねえよ！」

「えー？ だって私魔法少女だしー？ 超か弱いしー？」

「人狼蹴ワウルフつ飛ばした奴の台詞じゃねえ……」

「っていつか見つかったらどうすんのよ。静かにしなさい」

てしてしと頭を叩かれて、クライヴは小さく舌打ちをした。

セルシア湖を見張る兵士達は恐らく、湖を囲むこの森林も巡回しているだろう。

そして見つければ、当然ながらまた追い返されてしまう。

だから二人はこうして、ひっそりと森の中を探索している 実
際に歩いているのはクライヴだけなのだが。

「……しかし、何にも無いな。本当に」

クライヴは時々樹木の表面を撫でてみたり、落ちて行く葉っぱに目を凝らしたりするが しかし、それらしい痕跡は無い。

「まあ、今回『何か』が起きたのは『セルシア湖』であってその周辺ではない かも知れないし」

「湖の ましてや『魔物』に関する事なんだろう？ それじゃあ、

やっぱこの森には何にも

「あ、ちょ、ちょっと降ろして！」

クライヴが諦め気味に呟いた時、アリスが急にそんな事を言った。疑問符を頭に浮かべつつも、クライヴは言う通りにアリスをその背から降ろす。

と、途端にアリスは前方に駆け出した。足を少し痛めていたのと、ずっとクライヴに背負われていた事もあってか転びそうになりつつ

少し先を見ながら、アリスは言った。

「……………あつたかも、情報。というか、事件の根源」

小さく呟いたアリスのその声は、どこか 何か、恐れているような。怖れているような。そんな様子だった。

「事件の、根源？」

頭上の疑問符の数を更に増やしながらも、クライヴはその横まで歩いていく。

「……………おい。何だこれ」

言葉を失った二人の少し先。

そこには、一人の少女 童女、と形容した方が近いであろう風体のそれが が倒れていた。

水のように青く、空のように蒼いその髪。身に纏っていたのは、薄く透き通るような碧さのマント の、ようなもの。

「多分、この子 セルシア湖に住むとされる『精霊』セルシアよ」

アリスの声^{かしこ}が帯びていたのは『恐怖』ではなく、『畏敬』だった。畏^{おそ}まり、畏^{おそ}れ、そして何よりも敬う。

魔術という機構の根幹に位置する、偉大かつ強大、甚大にして絶大な『力』の顕現^{けんげん}。

絶対にして絶無である筈の『精霊』が、何故こんな所にいるのか。アリスは、混乱していた。

09 創世記の

神話の時代。

ただ只管に何も無い所に、三柱の神が生まれた。

光を司る一柱の神が、最初に天と地を創った。

闇を司る一柱の神は、次に大地を刻んで谷を、その残りから山を創った。

命を司る一柱の神も、続くようにして植物と動物を創った。

そうして、『世界』が始まった。

命は栄え、育まれ、そしてその命によって世界が広げられてゆく。神々は凄まじい速度で広がって行く世界を見守る為、自分達の手足となる五体の『精霊』を創り出した。

火、水、風、光、闇 五つの元素に対応したその五体。

彼らは神の命じた通りに世界中に散らばり、それぞれの『聖域』から世界を見守り始めた。

「
ってというのが『創世記』のあらすじ。まあ、学校に行く前
から聞かされる話よね」

アリスは手頃な岩に腰掛け、足の調子確かめながら言った。

「創世記くらい俺だつて知ってるっての」

クライヴは腕を組み、近くの樹に寄りかかって答える。

眠たげに閉じていた瞳を開け、アリスの方を見て彼は問う。

「で、その水の『精霊』　セルシアが、この女の子だって言うのか？　こんなのが？」

「こんなのとか言わないの」

クライヴの寄りかかっている樹と、アリスの腰掛けている岩の真ん中。

青い髪色の年端も行かない少女が眠っていた。

二人が彼女を見つけたとき、『とりあえず』という事でアリスがクライヴの纏っていた軽外套を毛布のようにかぶせたのだ。

「……確かに、創世記のその後の記述には『美しい女性の姿をした精霊』って説明があるけど。でも、服装に関する記述は創世記の通りなのよ」

「創世記に影響された夢見るオトメって線は？」

「あんたは魔力を感知できないから解らないだろうけど、この子は相当な魔力を持つてる。人間じゃあ　ううん、それこそ魔族なんかも優に超える量よ。少なくとも、私はこんなに魔力を保持できる生き物知らない」

アリスはそこで言葉を切り、そして少女の方を見る。

と、クライヴが思いついたように言う。

「とりあえず、起こした方が良くないんじゃないのか？　そうしたら直接話も聞けるだろうし」

「うーん。出来る事ならそうしたいんだけど、『魔力の流れ』が塞ぎ止められてるみたいだから」

「『魔力の流れ』？　何だよそりゃ。俺が魔術に疎いくらい知ってるだろ」

「ばつが悪そうに頭を掻くクライヴ。」

「そうね……オーブや杖　それから魔導書なんかには、人間で

「いう血管のような『流れ』があるの。で、何らかの要因からその『流れ』が遮られると、それは効果を失って　　場合によっては崩壊してしまうの」

「その『流れ』ってのがこの『精霊』にもある、っていうなら……

おい、マズいんじゃないのか？　真剣に」

「マズいわよ。そりやもうとつても、ね」

アリスが眉をしかめる。

「直す……いや、治す方法はないのか？　魔力の流れなら、魔力の扱いに長けた魔術師おまえがどうにかできるんじゃない……」

「出来ない訳では、ないわ……ただ　　」

「『ただ』……何だよ？」

「　　や、なんでもないんだけど」

「……お前らしくねーな」

「やけに慎重な様子のアリスを見て、クライヴは少し不気味がった。『気味悪がる事ないじゃない。流石に私だって思慮深くなる時だつてあるわよ』」

「いや、慎重になるのはいいんだけど。それ以外に方法はないんだろ？　じゃあ、やってみりゃいいじゃねーか」

「はあ……まあ、そうよね。うん」

思いつめた様子のアリスは、迷いを振り払うように首を振った。

そうして岩から降りて、少女の胸元に手をかざす。

詠唱が、始まる。

「《魔よ。この世に満ちる魔の力よ》」

静かで、しかし激しい力の奔流が、渦を巻きながら場を駆け回った。誰にも視えない無色の力。

「《断て。絶て。崩して壊せ。消して　　滅せよ》」

何かによって、何かが断絶された。崩壊した。消滅した。
横たわる少女から、塞き止められてきた力が解き放たれた。
樹と樹の間を駆け、天と地の間を走り、それは周囲一帯に迸った。

「《治せ。癒せ。連ねて結べ。創って　造れ！》」

何かが、何かを治癒した。連結した。創造された。

駆け巡り、奔り廻って、迸った力が、何かによって封じ込められた。

そうして、静寂。

詠唱を終えたアリスも、横たわった少女も、その様子を眺めていたクライヴも、一つとして物音を立てない。

ひゅう、と風が吹いた。木々が揺れ、葉達がざわめく。

波のような音が走り去って、幾つかの葉っぱが地に落ちる。

「　ん、う……」

そうして、少女が目を覚ました。

「お、気が付いたみたいじゃねーか。流石は見習い魔術師筆頭」

クライヴが感心したように声を上げた。

「大丈夫か？　どこか調子の悪い所は？　あ、俺らは別に悪い連中じゃあなくて　」

先輩騎士達に叩きこまれた紳士的振る舞い（の断片）が顔を覗かせる。

少女の横に屈みこむと、クライヴは思わずそんな事を尋ねていた。
その時。

「 クライヴ、離れてッ！」

アリスが叫び、クライヴを両手で跳ね飛ばす。

「うおおっ……おまつ、何すんだ急に!？」

「いいからこの子から離れて！」

必死の形相でクライヴをばしはしと叩くアリス。

「はぁ? お前マジで何言ってる」

クライヴがきよとんとしながらアリスに非難の言葉を掛けようとして、しかしそれは遮られた。

氷で出来た巨大な刃が、少女の周囲の地面から飛び出したからだ。
巨大な氷刃　その数は八。

少女の八方を囲むようにして、その刃は生まれた。

クライヴはアリスを抱えて咄嗟に転がる。

その判断は正しかった。一瞬前に二人がいた場所からは、氷の刃が生えていたのだ。

「……おい、アリス。『精霊』ってのはこんなに喧嘩っ早いモンなのか？」

「そんな……まさか、そんな事は有り得ないわ。精霊は人々を守る為にいるんだもの」

クライヴに抱えられながら、アリスはふるふると首を振った。

「いいえ、それは違います」

鋭く、冷たい声が響いた。それは八つの氷刃の中から。

「私達は世界を守る為に。世界に仇あだ為なす者を討つ為に
ずずず……と、氷の刃が地面へと戻ってゆく。

そうして現れたのは、先刻の少女　ではない。

透き通るような青い布をその身に纏った、蒼い髪に碧い瞳の美しい女性。

『創世記』の記述通りの『水の精霊』。

その突き刺すようで、凍て付くような視線は、二人を確りと見据えていた。

『「聖域」を侵す愚者達よ。その身を以って罪を償いなさい!』

「か、勘違いだ……!」

クライヴの言い訳は、精霊には届かない。

地面から再び氷の刃が生まれ　宙に浮かぶ。やはり、その数は八。

ふわふわと中を漂う刃が「ぴたり」と動きを止め、その切っ先が二人を示す。

『私達には慈悲がありません。せめて、苦しませずに葬ってあげましよう』

「だから勘違いだつてばーっ!」

アリスが叫ぶが、しかし精霊は耳を傾けない。

精霊と人間の、圧倒的な実力差。
制裁が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9459n/>

平和に埋もれた魔王の契約

2011年2月8日20時40分発行